IS～一夏の（非）日常～

ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ～一夏の（非）日常～

【Ｎコード】

Ｎ７７７３Ｖ

【作者名】

ころり

【あらすじ】

朝起きると、人参型のカプセルがあってっ！？

ひょんなことから、小さくなってしまった一夏

これぞ、一夏の（非）日常

※この時間軸は在ってないようなものなので、よろしくお願いします。ちなみにオリキャラは出す予定です。

ＰＲＯＬＯＧＵＥ（前書き）

どうも、初投稿のころりです。
ＩＳにもこんな日常があればなぁ～と、思い…書かしていただきました。
基本的には、戦闘は無し、シリアスも（多分）無い、ただのギャグの塊です。

PROLOGUE

「んーっ！よく寝た」
清々しい朝を迎えた俺。
俺の名前は織斑一夏、世界で唯一インフィニット・ストラトス、通称《ＩＳ》を動かせる男子だ。
何故世界で唯一かって？
それはＩＳは女性にしか動かせない機械だからなんだよ。
その例外、イレギュラーが俺なのだ。
俺がＩＳを動かせる事が分かったのは、高校受験の時…。
受けるべき高校、藍越学園とＩＳ学園の会場を間違えてしまったのだ。
その時、会場にあったＩＳに触れたら動いた。
ただそれだけだ。
周りからしたら一大事だったんだろうが、今の俺の方が一大事だよっ！
さっきも言ったとおり、ＩＳは女性にしか使えない、つまりＩＳ学園には男子が一人もいないっ！
これを地獄と言わず、何と言えようかっ！
はーっ！はーっ！お、落ち着け、俺。
まぁ、自己紹介はこれくらいにしてだな…。
「これなんだ？」
俺が見た視線の先には、人参型のカプセルがあった。
「これってやっぱり…」
人参にはボタンが付いていて、その横に『押してみて♪』と書かれた紙が張ってあり、怪しさ満天だ。
「もしかしてもしかするとだけど…押してみるか」
ポチっと音が鳴り、人参が縦に割れた。そして中から出てきた人は
「やあやあ、いっくん、相変わらずカッコいいねぇ☆」

篠ノ之束さんだった。篠ノ之束、ＩＳの産みの親であり俺の幼馴染み、篠ノ之箒の実姉である。
それにしても、いつもいつも変な登場の仕方でこの人ホントに天才発明家なのだろうかと思うよ…。
『何とかと天才は紙一重』ってことなのかな？
「いっくん、今、束さんに失礼な事考えたでしょ、考えたよね～？」
ぎくっ！
「か、考えてませんよ～、あ、あはははは」
考えたが誤魔化す俺…。
「と、ところで何故俺の部屋に？」
話題を逸らしたんじゃないよ？
本題に入っただけ、うん。
「そーだった、今日はいっくんにお願いがあってきたんだよぉ☆」
…『お願い』なんて物はいつも千冬姉か箒にする筈なんだけどな？
「なんですか？」
とりあえず、聞いてみるに限る。
「それはだねぇ、新薬の実験ｄ…、ゲフン、被験者になって欲しいんだよね～」
今この人実験台って言ったぞっ！？
「さぁさぁこの薬を飲んでよ、いっくん」
謎の薬を飲むことを強要されて、室外に逃げだそうとする。
「この天才束さんに抜かりは無いのだよ、いっくん♪」
ガチャガチャッ！
「鍵が開かないっ！？」
「内側からは絶対に開かないからね～、ほら、覚悟を決めて飲んじゃおうよ、いっくん」
束さんがどうやら扉に何かしたらしい…。
「誰がそんな謎の薬を飲む馬鹿が…ムグッ！？」
束さんに瓶ごと口に突っ込まれた。
「束さんの勝利っ！やった～」

「ゲホッ、ゴハッ…、な、な、何してくれてんですかッ！？」
と、言いながら、さっきの薬を吐き出そうとする。
「大丈夫だよ、いっくん。死にはしない…」
「本当ですか？」
その言葉に救われ…
「…多分」ボソッ
無かった…。
「えええぇぇぇぇッ！？」
多分って言ったッ！？この人言ったよねッ！？最低だぁぁぁっ！
「じゃね、いっくん」
ズドドドド！
束さんは人参に乗り込んで飛んで行ってしまった。「どっかのエイリアンか何かかよ…、じゃなくて、薬を飲まされたんだからどうなってるか確認しないとッ！」
鏡をのぞき込み、異常がないか確認する。
「ふぅ～、取り越し苦労だったか…、良かったぁ」
コンコン
「一夏、入るぞ？早く起きて食堂に…行く…ぞ…ッ！？」
幼馴染みの箒が入ってきて早々、何かに驚いたようだ。
「い、一夏、なのか？お前…いや、そこの少年…」
は？何を言ってんだろ、箒は。
「当たり前だよ、僕は一夏だよ」
ん？ちょっと待て、今、俺は自分のことを『僕』って言わなかったか？
「そ、それならば、何故そんなに身体が小さいのだッ！？」
「なあぁぁぁぁぁッ！？」

ＰＲＯＬＯＧＵＥ（後書き）

つかりた～、ＰＳＰではさすがにキツイですｏｒｚ

分かりにくい場面、質問などは感想に書いといて下さい。

返事と一緒に書き込んどきます。

感想待ってます～♪

ただしイケメンに限る！（前書き）

更新できた。
なんか嬉しいな。
駄文＋長文のコンボです。

ただしイケメンに限る！

「つまり、うちの愚姉が一夏に変な薬を飲まし、こんな姿になってしまった、と？」
「そうなんだよ。それで満足した束さんは逃げたってとこだ」
朝、小さくなった俺と起こしに来てくれた箒で現状を話し合っていた。
「……一度、千冬姉に相談するってのはどうだ？」
俺は箒に聞いてみた。
「フム、私もそれがいいと思うのだが…、だが一夏、どうやって千冬さんに相談するのだ？」
箒の意見はもっともだ。
『千冬姉、俺が一夏だ』って言っても、多分千冬姉は信じてくれないだろうな。
「だけど、今、千冬姉以外に頼れる奴なんて…」
「私がいるだろうッ！！」
箒が大きな声でそう言った。
しかし箒は熱くなりすぎたと思ったのか、すぐに謝ってきた。
「す、すまん…」
箒を怒らしてしまった。
「俺が悪いんだから謝るのは俺の方だ。ごめんな、箒」
「ふ、ふんっ！…／／／」
やっぱり、怒らせちゃってるな。
箒に嫌われたかな？

コンコンッ

ドアを叩く音が聞こえたので、俺と箒はベットの中に隠れた。
「〜！（誰か来たみたいだぞ？どうする、箒）」

俺が小声で箒に聞く。
「～ッ（お前の状態をバレるわけにはいかないし…、仕方ない、居留守を…）」
箒と俺でどうするかを悩んでいたら、ドアの外から声が聞こえてきた。

「一夏～、起きてる？」
タタタッ
「今、篠ノ之の部屋に行ったのだが、もぬけの空だったぞ。食堂にも居ないようだ」
「ありがとう、ラウラ。僕も一夏を呼んでるんだけど、返事がないんだ」
スタスタ
「おはよ♪あれ、一夏くんの部屋の前でなにしてるの？シャルちゃん、ラウラちゃん」
「あ、楯無さん。一夏と箒さんがいないんです。箒さんの部屋には誰もいなかったようだし、一夏の部屋にいるのかなっと思って…」
「…中には入ったの？」
「いや、まだだ。私の嫁が浮気などするはずが無いからな」
「じゃあ、入りましょう」
「えっ？でも…」
「大丈夫よ、会長権限で入るだけだから☆」
「あ、あははは…」

箒と俺はドアの外から聞こえてくるやり取りを聞いて、固まっていた。「…（どうするッ！？箒）」
俺は困り果てて、箒に助けを求めた。
「…！（わ、私に聞くなっ！）」
そうこうもめている内に、部屋のドアが開けられた。
「おはよー♪一夏くん、起きなさい」

「一夏、おはよう」
「一夏、早く起きろ。だらしないぞ！」
そこで三人の時間が止まった。

・状況　篠ノ之箒が織斑一夏の部屋で、年端も行かない少年をベットの中に押し倒している。

・結論　なにやってんの！？

「箒ちゃん…、おねーさんは温かい目で見守ってあげるわ…」
と、言って楯無さんは冷たい目で箒を見た。
「箒さんに…、そんな趣味がっ！？…ぼ、僕で良かったら、理解ぐらいはできると思うよ…」
シャルは理解できないって顔をしていた。
「…これがショタコンと言う奴か、本当に男の子を襲うものなのだな…」
ラウラに至っては、何かに納得してるし…。
「ち、違うっ！これは…」
箒は必死に弁明しようと頑張っている。
「まぁ、他人の性癖をとやかくはおねーさん言わないわよ。ところで箒ちゃん…」
しかし楯無さん…、やっぱり箒を冷たい目でみるんですね…。
箒はその冷たい目にたじろぎながらも答える。
「…なん…ですか？」
「一夏くん知らない？」
ビクッ！
俺と箒が同時に固まった。
「…」
箒が黙りこくってる。
箒なら匿ってくれるよな？

「……夏なら…」
ほ、箒さん？まさか…
「一夏ならここにいますよ、この少年が一夏ですッ！」
ギャァアアアアッ！
ちょっとッ！？
前言撤回、信用できるのは千冬姉だけだッ！。
つーか、箒さん。何故俺をそんなに睨む、今のは俺が悪いのッ？
「「「は？」」」
三人は思いっ切り『なに言ってんの？こいつ…』って顔で箒を見ている。
「はぁ、言うしかなさそうだな…」

ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー

「なるほど、つまりそのちっさいのが一夏くんってこと？」「…はい」
これまでの経緯を三人に話した。
「篠ノ之博士…凄いね…」
シャルは呆れとも感嘆ともとれる顔で呟いた。
「むぅ…（ジー）」
ラウラは何故かこちらをジッと見ている。
「だいたいのことは分かったけど、どうしようかしら…」
楯無さんは珍しく悩んでいる。
ホントに珍しい。槍でも降りそうだ。
思い立ったが吉日みたいな人が…。
まぁ、周りからすれば吉日から凶日に早変わりなんだけど。
「一夏くん、今物凄く失礼な事考えたでしょ？おねーさんに言ってみなさい」
「い、いいえ、全く、そんなことは…」
誤魔化す俺。

「正直に言わないとた・べ・ちゃ・う・ぞ☆」
「すいませんッ！」
土下座になる俺。
「…そんなに嫌がらなくても…」ボソリ…
「はい？どうかしましたか？」
よく聞こえなかったので聞き返してみた。
「ハァ…何でもないわ、やっぱり一夏くんよね」
あれ？何か失望された？何故？
「そんなことより、どうするの？一夏。その姿じゃ…」
シャルは割と本気で考えてくれてるみたいだ。
「いっそのこと、そのまま受けてはどうだ？一夏」
箒は面倒くさくなったのか、投げやりな答え。
箒が考えを放棄する、なんて言ったら、殺されるだろうから言わない。
「そうだな～、ここはもう開き直ってこのまま行ってみるか。いい案浮かばないしな」
俺はこのまま授業を受けることを決意した。
「…可愛い」
ラウラがよく分からない事をいいだした。
「「「は？」」」
綺麗にラウラ以外の声がハモった。
「嫁…、わ、私のことラウラお姉ちゃんと呼んでくれないか？」
「ラウラ…お姉ちゃん…？」
ラウラが意味が分からないお願いしてきた。
「あ、ラウラちゃんだけ狡い～、私も楯無お姉ちゃんって呼んで？」
楯無さんまでよく分からないことを…。
あ、楯無さんがよく分からない（馬鹿な）のは元からか。
良かった、正常で。
「一夏くん…後で生徒会室で『オハナシ』しましょうね♪」
楯無さんからどす黒いオーラが駄々漏れだ。

なんでみんなして心が読めるの？
「分かりました、呼べばいいんですね？楯無お姉ちゃん」
俺はよく分からないが、殺されそうだったので呼ぶことにした。
呼んでも実害無いしな。
「はぅ…／／／」
楯無さんは顔を真っ赤にする。
どうしてだろう？
「顔が真っ赤ですよ？楯無お姉ちゃん」
「ななな何でもないわよっ！？」
何でもないらしいので、俺は引き下がる。
「そうですか？分かりました。でも気を付けて下さいね、風邪は引きじめが肝心なんですから」

「わ、わわかったわ／／／」
「「「むぅ」」」
楯無さんにそう注意すると、シャル・ラウラ・箒が羨ましそうな目で楯無さんを見ていた。
そんなに風邪を引きたいのか？
コイツ等の考えてることは分からん。
はぁ…、それにしてもこの姿で授業…か。
大丈夫かなぁ…？

ただしイケメンに限る！（後書き）

どうでしたか？

前回の通り質問何でも受け付けますので、感想にでも…

ショタって人気があるよね（前書き）

久しぶりの更新です。

なかなか…疲れた…な

ショタって人気があるよね

「おはよー」
「あ、織斑くんおは…よ…う…」
クラスメイトが挨拶を返したと同時に固まった。
そりゃそうか、いきなり知らない男の子から当たり前のように挨拶されたら誰でも不審がるわな…。
「…あの、織斑…くん…だよね？」
ですよね～、これが当たり前の反応だよな…。

「「…かわいーーーーッ！」」
…あれ？
何か身の危険を感じるゾ☆。
「私も触るー！」
「これってお触りオッケーッ！？」
……ふざけてる場合じゃないよな…。
「お持ち帰りはッ！？部屋に持ち帰ることはできますの！？」
どこか聞いたことのあるドリル英国女子の声が…。
「一夏はあたしが持って帰るから！あんたは黙って！」
「一夏さんは渡しませんわ！鈴さん！」
更に聞いたことのある、酢ぶt…中国女子の声が…。
「うるさいぞッ！特に酢豚と飯マズ縦ドリル！」
そこへ千冬姉が来た。しかも、控えてた言葉まで言いながら。
「いつから一夏は貴様等の物になったんだ？詳しく詳細をじっくり事細かに教えてもらおうか…」
いつもながら千冬姉はすごい迫力…。
少々、てかかなり怖い。
「ん？なんだ、この子供は？」
千冬姉が俺がいることに気づき、近付いてきた。

「ふむ…、どこか一夏の幼い頃に似ているな…」
さすが、千冬姉！
ほぼ核心に近い意見を。
「「さすが、ブラコン…」」ボソッ
「セシリア、鳳鈴音は後で一人ずつ私の部屋まで来い！いいな…」
セシリアと鈴が何か言ったけ？
鮮血をみるより明らかな死亡フラグが…。
まあ、いいや。
先ずは千冬姉に相談することが先決だ。
「俺だよ、俺。一夏だよ」
「………………………………一夏？」
「うん、俺は織斑一夏だよ、千冬姉」
「やはり、千冬さんでも戸惑うか…」
千冬姉が固まったところに箒が来た。
やっぱりみんな戸惑うよね。
「最初は僕たちもそうだったしね…」
シャルも、戸惑ってたな。
…箒に。
「教官！そこの少年は教官の溺愛する一夏本人です！」
ラウラは…よく分からんな。
家族愛はあっても溺愛はないと思うぞ？ラウラさんや。
「織斑は一旦私と来い、後の者は山田先生がいらっしゃるまで自習だ、いいな？」
「「「はーい」」」
千冬姉はクラスに指示を出し、俺を抱き上げた。
…おかしいね。
「千冬姉、おかしい」
すかさず、ツっこむ俺。
「なにがだ？」
千冬姉は本気で分かってないみたいだ。

もういいや、面倒くさい。

＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ーーー＊ー
ーー＊ーーー＊

「で、だ。おまえは怪しい薬を飲まされて体が縮んでしまったと…」
そんなどっかの某迷探偵の話みたいな略し方せんでも…。
だが、その前に…
「いいかげん抱きつくのは止めてくれよ、千冬姉…」
現在の状況を言ってみよう！

・俺、千冬姉の膝の上＋抱きつかれてる
・千冬姉、俺を抱きしめてニヤニヤしている

こいつ変態かッ！？
あぁ、変態だったか…なら仕方が……
「…無くねぇよ！」
「なにがだ？一夏」
目敏く千冬姉が反応。
いや、この場合は耳敏いかな？
まぁどっちでもいいや。
「いや、千冬姉がはｎ「離さない」」
ですよね～。
因みに、千冬姉は息が荒い。
過呼吸症候群だろうか、そうだよな、そうであってくれ！

ーーーそれから…ーーー

そうこうしている内に、昼休みになっていた。
「まぁ兎に角、お前は暫くそのままでいろ」
そのままでいろと言われましても、自力じゃ戻れなさそうだしな…。

俺は返事するしか選択肢がないので返事する。
「しかし、その格好じゃあ、何かと不便だろ？」
「ああ、服のこと？」
体の縮んだ俺は、とりあえず寝巻きのままウロウロするのはさすがにマズいと思い制服に袖に腕を通した。
…通したんだ！
しかし虚しく、袖口には届かず某のほほんさん状態に…。
なので今はブカブカの服を着ている。
「今、たまたま偶然手を置いたところにこんな服が置いてあってだな…」
千冬姉が見せてくれたのはフリフリのゴスロリ衣装だった。
その見せ方といい、俺に着ろと？
「着ないよ？そんなの僕着ないよ？」
あ、動揺しすぎて口調が元に。
意識してないとすぐに僕口調になるからな…。「いや、着た方が良いぞ一夏、と言うか今着ろ」
やはり俺には拒否権がないんだね。
予想は付いていたけどね〜。
だけどこれだけは…断固拒否する！
「絶対着ない！」

変態って犯罪だよね……？（前書き）

漸く更新です・・

変態って犯罪だよね……？

で、結局のところ…穢れちまったよ、俺ぁ…。
あの後言うまでもなく取り押さえられ、あっと言う間に着替えさせられましたよ！
「しかしなんでゴスロリなんだよ…、てか何で持ってんの？」
千冬姉の性格からして普通は持ってなさそうなのに…。
「よけいな詮索はするな、死にたいのか？」
という千冬姉の一声で何にも聞けなくなりました。
誰だって命は大事だよね★

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……どうしてこうなった」
あ……ありのまま、起こったことを話すぜ…！
「わぁ～、可愛いね、一夏。お人形みたいだよ？ねえねえ一夏、僕のこのドレス着てみよ？」
「うむ、これが萌というやつなのだな、クラリッサ。しかしこれを着こなすとは……流石、我が嫁だ！」
「一夏さん……可愛らしすぎですわっ！（＊´Д｀＊）ハァハァ」
「一夏…次はこのチャイナ服を着ない？というか、着て、着なさい！分かった？」
「まて、私が先だぞ？一夏にはこの和服の方が似合うに決まっている！」
「ちょっと待ちなさい、おねーさんが最初よ？年功序列って言葉、知ってるわよね。と言うことでおねーさんの抱き枕になりなさい、これは会長命令よ」
………………変態しかいない。

変態に囲まれて変な服を持ち合って、僕に着せようとしてくる。
まぁ、楯無さんはいつものことだからいいとしても…。
「一夏くん？いい加減にしないと、本当に襲うわよ？」
「すいませんでした」
本当に何で人の頭の中が分かるの？
ひょっとしてエスパー？…な訳ないか…。
「話は戻すけど、さっきから言ってるように、そんなものは着ない！」
「「「「えっ！？」」」」
何故驚く？
普通じゃないの？
「一夏、今着てるじゃない」
鈴が俺の着ているゴスロリにいち早くツッコんでくる。
「しょうがないじゃん、千冬姉に無理やり着せられたんだから…」
手足を押さえられ、服を脱がされ無理やり着せられたんだから抵抗の仕様がないよな…。
そーそー、こんな風に手足を抑えつけられて………。
「って、何やってんのッ！？」
右手には箒、左手には鈴、右足にはセシリア、左足にはラウラ、腰の方にはシャル、胴体には楯無さん……。

…………正直重いです。

言ったら殺されるから言わないけどね。
「えっ？着せ替えだけど、何か問題ある？」
当たり前のように楯無さんが笑顔で答えてくれた。
わーい、こういう時にはこう言えばいいんだよね？
大丈夫だ、問題しかない！だよね…。
そして箒の横には当然のような顔して束さんがいた。
「ホントだよね、ちーちゃんがいっくんにこんな服を着せたかった

んだね〜♪」
……元凶が何食わぬ顔で会話に参加していた。
「いたァァァア！！」
僕は絶叫し、捕まえられていることも忘れ、束さんに飛びかかろうとしたが、あえなく失敗。
逆に捕まってしまった。
「いっくんはそんなに束さんの事が好きだったんだねぇ〜、束さんはいっくんの熱烈な告白に応えてあげるよ♪」
言ったのも束の間、みんなにフルボッコにされる束さんがいた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー

「も〜、酷いよ〜、箒ちゃん〜」
「姉さんが変なことを言うからです！」
うん、分かっちゃいたけどね…。
やっぱり僕と箒以外アウトオブ眼中だな、この人。
「あ…あの……篠ノ之博士…？」
シャルがめげずに束さんに話しかける。
勇者だな、シャル！
「あぁーもう、五月蠅いなぁ！私は今箒ちゃんと話してるんだけど…！！　邪魔しないでくれるかなぁ！」
これまた定評のある束さんの返し。
「…ごめんなさい」
この返しでシャルがおとなしく引き下がった。
しかし、束さんはかなり憤慨しているようなので話題を変える。
「と、とりあえず！束さんは何でいるんですか？」
シャルのフォローと同時に、理由を聞くことに成功。
僕ＧＪ！！
「ん？あぁ、それはだね、いっくんに会いに来たんだよ♪」

…朝にあっただろうが…。
なんてツッコまないよ、怒らしたらナニされるか分からないからね。
「ん～朝はちーちゃんに邪魔されちゃったからだよ、いっくん」
………僕…そんなわかりやすい思考回路をしている？
「ここじゃ話しにくいから、違うところにいこうか」
と、言われ束さんに抱きかかえられ部屋を出て行った。
慌てて束さんに聞く。
「ちょっ！？どこ行く気ですかっ！？」
「ん？私といっくんの愛の巣だよ♪」
と、束さんが馬鹿なことをぬかしてやがりますので僕は高らかに抗議しよう！
「そんなモノはない！」
「え～、いっくんのケチー」
ケチとかの問題じゃないと思うけどね。
「どこへ行くって？束」
バコン！と束さんの頭に出席簿が、驚くべき速さでぶち当たり、目を回して倒れた。
投げたのはご存知の通り、我等が鬼神≪織斑千冬≫です。
「流石、鬼神千ｙ…ふべっ！？」
「誰が鬼神だ…」
鬼神もとい千冬姉が後ろに立っていた。
「おい、篠ノ之、そこの馬鹿を連れて付いて来い」
「は……はい」

変態って犯罪だよね……？（後書き）

次は取り敢えず設定で

設定

織斑一夏の設定

幼体化した一夏の身長１３０ｃｍぐらい

やっぱりショタなので可愛らしいお顔

服は基本的に千冬姉が持ってきてくれてるらしい。

僕っこ（の筈…！）

こんな感じの曖昧ですが、他に疑問要望などがあればドシドシお願いいたします♪

とは言ったものの…

書くことがないから直ぐに終わっちゃうしな～

じゃあここでオリキャラでも募集しようかな～

もともと出す予定だったし。

では、特に指定もないので思いついた人はよろしく御願いします！

ちなみに女の子の方が嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7773v/

IS～一夏の（非）日常～

2011年12月20日23時51分発行